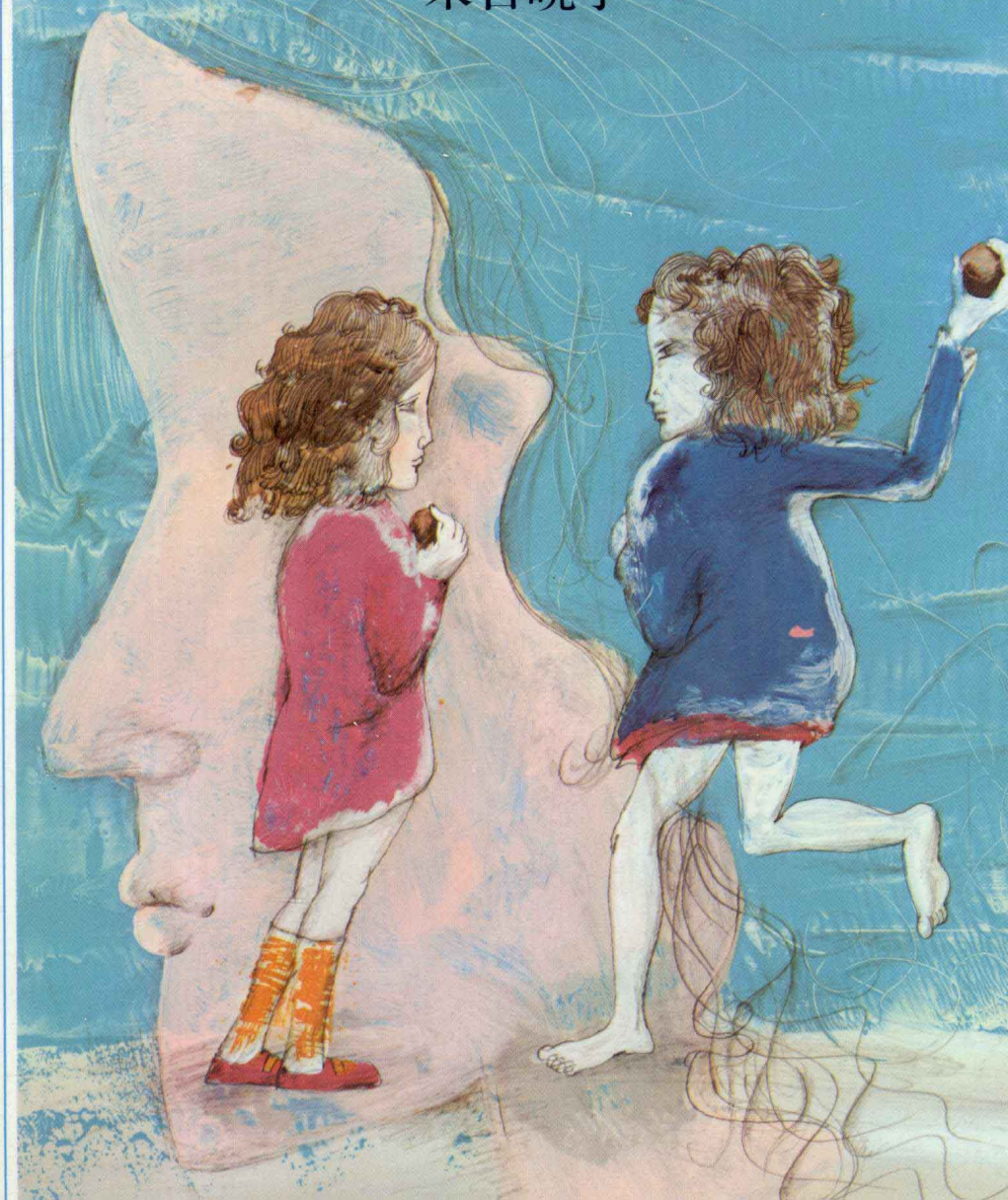


# 星に帰った少女

末吉暁子



すえよしあきこ  
913 末吉曉子

星に帰った少女

偕成社 1978

238p. 21cm (長編創作童話)



星に帰った少女

1977年3月 1刷

1978年3月 4刷

著者 末吉 曉子

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 東京(260)3221 振替 東京5-1352 番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

©末吉曉子 1977

◇著者の了解により検印廃止 ◇乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

Published by KAISEI-SHA, printed in Japan

8393-727010-0904

# 星に帰った少女

末吉暁子

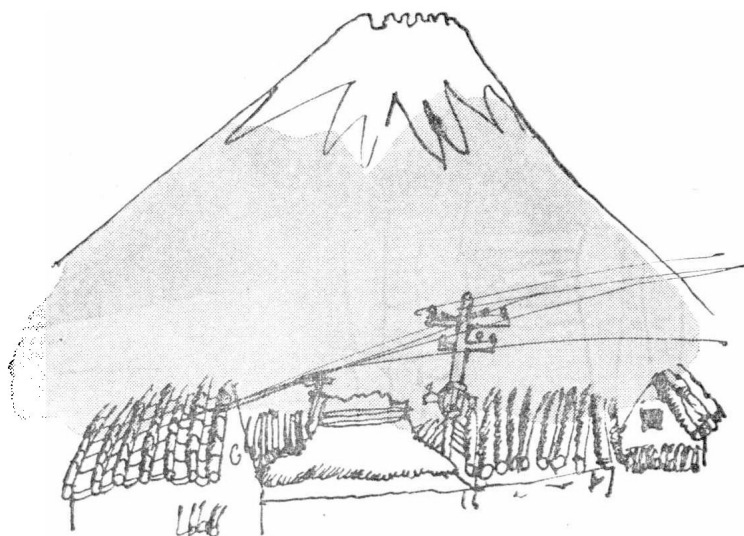


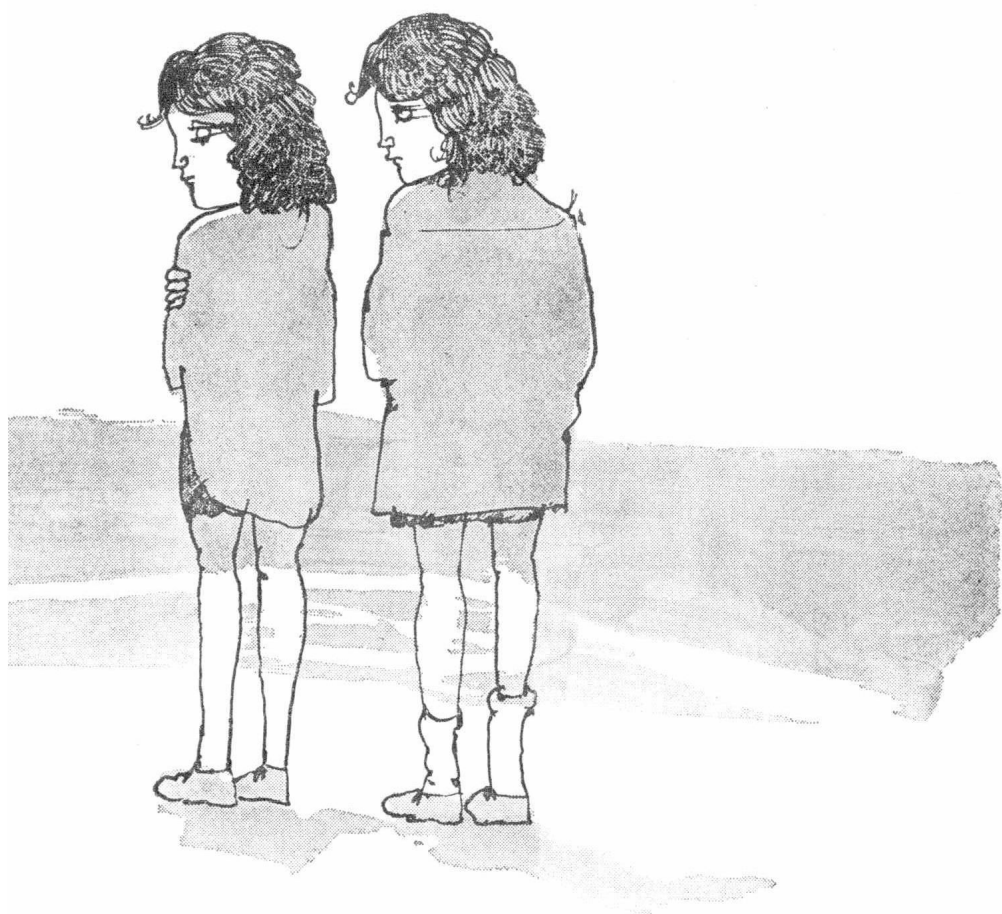


この地球<sup>ちきゅう</sup>とおなじような星がどこかに  
あり、わたしみたいな女の子が生きてい  
る……その星では、きつとみんな、もっ  
と豊<sup>ゆた</sup>かな暮<sup>く</sup>らしをしているんです。おい  
しいものを食べ、すてきな家に住み、あ  
たたかい洋服<sup>ようふく</sup>を着<sup>き</sup>ているのです。戦争<sup>せんそう</sup>な  
ども、もちろんないでしょう。

きつとそうです。もう、あの子は、自  
分の星に帰ってしまったのでしょうか。

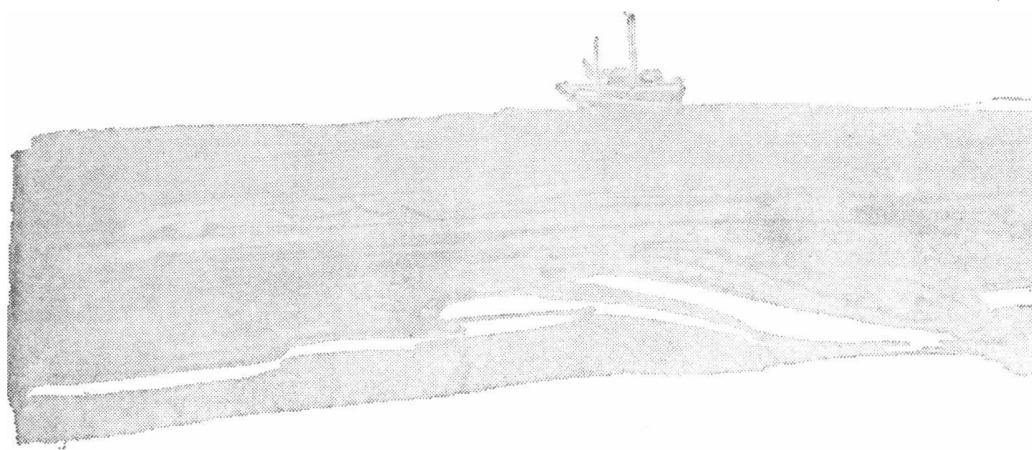
——本文より——





■ もくじ

|                                                              |                                         |     |
|--------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|-----|
| 第一章                                                          | ママからのプレゼント                              | 8   |
| 第二章                                                          | いちょうの落ち葉 <sup>お</sup>                   | 25  |
| 第三章                                                          | プラム色の夕日                                 | 61  |
| 第四章                                                          | 海 <sup>うみ</sup> への公園 <sup>こうえん</sup>    | 89  |
| 第五章                                                          | 星に帰 <sup>かえ</sup> った少女 <sup>しょうじょ</sup> | 171 |
| 新人 <sup>しんじん</sup> の快作 <sup>かいさく</sup> (解説 <sup>かいせつ</sup> ) | 佐藤さとる                                   | 234 |



著者 末吉 曉子 すゑよし あきこ

一九四二年神奈川県に生まれる。  
青山学院女子短大卒業後、出版社  
に勤務、おもに児童図書の編集を  
担当。現在、創作活動に専念。お  
もな著書『かいじゅうになった女  
の子』『ママ、あててみて』など。

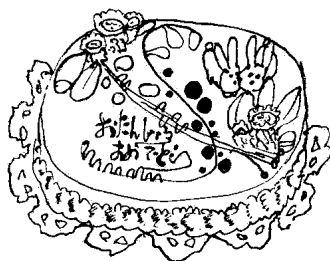
画家 赤星 亮衛 あかほし りょうえ

一九二五年熊本県に生まれる。海  
老原喜之助に師事し、現在、油絵  
制作のほか、自作の絵本、さし絵  
の世界で活躍。

# 星に帰った少女



## 第1章 ママからのプレゼント



1

七時のニュースがはじまった。

ママがもうすぐ帰ってくる！

マミ子は、テーブルにひじをつき、てのひらに  
あごをのせたまま、にいつと、ひとりでにわらい  
がこみあげてくるのを、むりにおさえていた。

十二本の小さなろうそくが、ケーキの上であか  
りをつけてもらうのをまっている。ろうそくを十  
二本もおまけしてもらうのは、ずいぶん勇気（ゆうき）のい  
ることだったが、ケーキ屋（や）のおねえさんは、「お  
誕生日（たんじょうび）？」といいながら、気（き）まえよくおまけして  
くれた。

いまから、マミ子の誕生（たんじょう）パーティーがはじまる  
のだ。

ママは、ふだんよりはやく会社（かいしゃ）から帰（かえ）ってくる

はず。いまごろは、息を切らし、エレベーターをまちきれずに三階まで、カッソカッソカッソと、大きくくつ音をさせて、階段をのぼりはじめたかもしれない。もしかしたら、いいえ、きつと、両手に大きなプレゼントの箱をかかえているだろう。

（もちろん、中身はあたしのコート。）

友だちのヒロ子を買ってもらったばかりのような、ウェストが細くしぼってあって、すそのひろがった、しゃれたデザインのコートのはずだ。ママには、なんでもスタイルブックをみせたり、ちゃんと絵にかいておしえてあげたりしてあるから、だいじょうぶ。美しい包装紙をはがして箱をあけ、新しいコートをとりだし、鏡にむかってそつと腕とおしてみる自分を、マミ子は想像してみた。

「あたしも、すこしは、かわい子ちゃんにみえるかもね。」

マミ子は、ほおを両手でやさえた。

「ああ、はやくママ、帰ってこないかな。」

じつをいうと、ほんとうのマミ子の誕生日は、もう五日まえにすぎってしまったのだ。そのときには、クラスの友だちが三人、このアパートにきて、お祝いをした。

あけみからは赤いリボン、のり子からは絵入りの便せんと封筒、ヒロ子からはブローチを、お

祝いにもらった。この三人は、いつもおたがいの誕生日には、ささやかなプレゼントをすることになっていた。

ママは、仕事がいそがしくて帰っていなかったけれど、みんなでレコードをかけたり、歌をうたったり、おしゃべりしたりしていたら、すぐ時間がたってしまった。ママが帰ってきたのは、パーティーがおわって、みんなが帰ってしまったあとだった。

そのとき、ママは、「もうすこしでいそがしい時期がおわるから、そうしたら、ママとふたりで、また誕生会をやりなおそうよ。」といった。

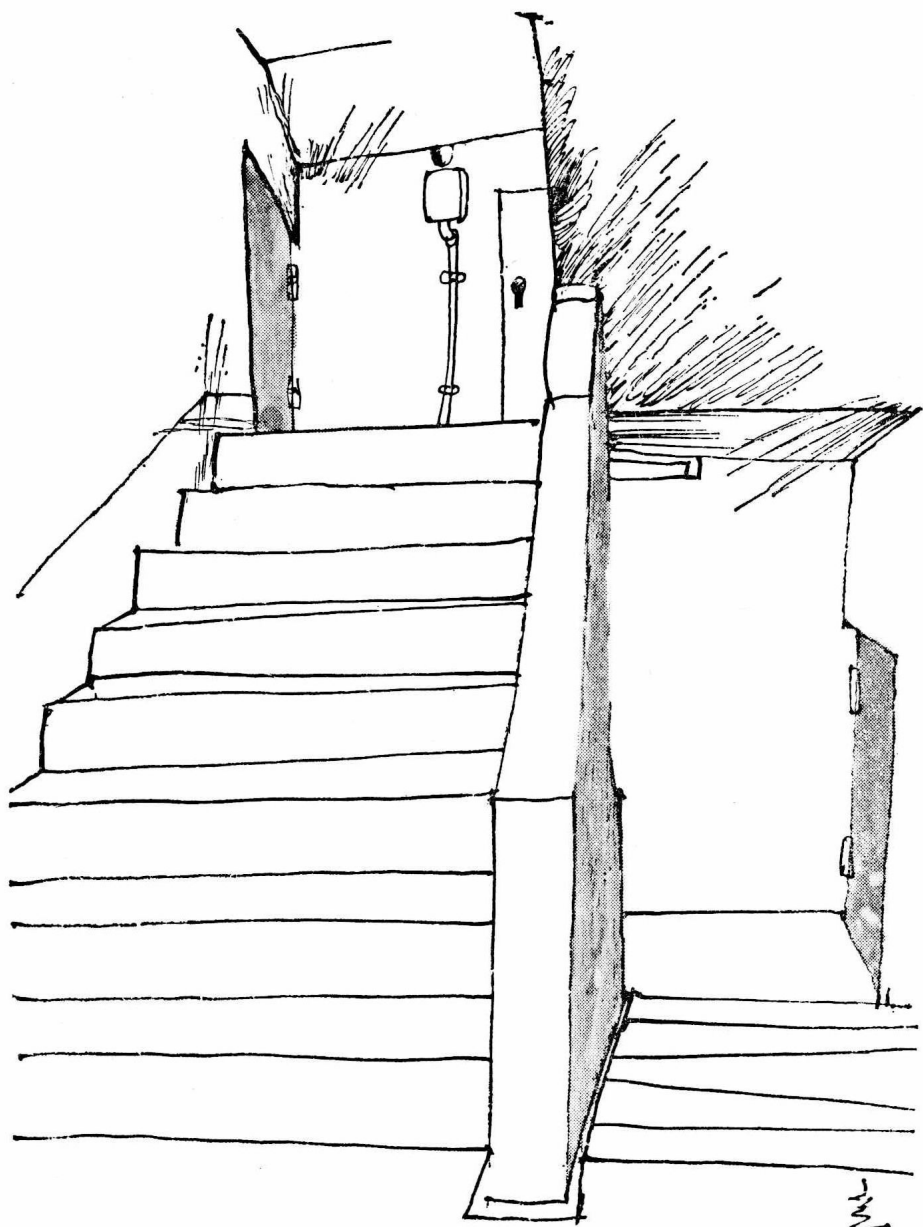
もちろん、ママ子は大賛成。お誕生会を二どしたからって、二つ年とるわけじゃないし、それに、ママからのプレゼントだって、まだもらってない。

ママ子がそういうと、ママは「近ごろのわかいモンにはかなわないわね。」と、半分あきれ顔でわらっていた。

けさ、ママは、

「きょうは、ぜったい残業しないわよ。おそくとも七時には帰るから準備しててね。」  
といて、でていった。

ところが、おやおや、もう、ニュースの時間もおわってしまった。テレビは歌番組になった。ママ子は、またテーブルの上をながめた。



（はいはい、ママのおいっけどおり、ロワールで、ケーキも買いましたよ。デパートの下の花屋で、ばらも買いましたよ。おすしも、ちゃんと上を二人まえ、とっておきました。そろそろ、ちょっぴりひからびてくるころよ。それに、あたし、ちょこちょこっと、おすましとサラダつくっておいたわ。いったい、だれの誕生日なのよ、いやんなっちゃう。）

マミ子の胸のなかで、ぼちちとともった不満は、さいしょマツチの火ぐらいだったのが、だんだん大きくもえひろがってくる。

生まれてから、ずっとつきあっているママだけど、時間をまもってくれないのには、まいってしまふ。それが、ママのいちばんの欠点、とマミ子はおもう。

「化粧品会社の宣伝部って、そんなにいそがしいものなのかしら。そりゃ、ここのうちは父親がいないから、ママのかせぎでまかなっているんだってことは、よくわかってるけど、それにしただってねえ。こんなときぐらい、約束までもってくれたっていいじゃないのよ。」

マミ子の記憶のひきだしをいくらあけていっても、父親の記憶というのは、でてこない。マミ子がもの心つかないうちに、離婚したらしい。

ママは、結婚まえからつとめていた会社で、ずっと仕事をつづけている。マミ子が保育園にいつているころまでは、年配のお手つだいさんが、夕がたきでくれている。マミ子はママよりも、そのお手つだいさんのほうになついてしまって、ママを悲しませたそうなのだが、マミ子は、そ

んなことおぼえてもない。

小学校へはいってからは、放課後を保育クラブですごした。でも、おなじクラスのヒロ子やあけみがいっしょだったから、あのころはけっこうたのしかった。ママの帰りがおそいときは、ヒロ子の家で夕食をごちそうになることもあった。

このごろは、マミ子もかんたんな料理ならつくれるので、ママの分もつくってまわっていることが多くなった。ママがいなくても、なんでもひとりでするようになってくると、ママの仕事はますますいそがしくなってくるようだった。ママは仕事がいすきなのだ。仕事のことを話すと、ママの目は、きらきらかがやいた。それに、子どもがいるからという理由で、仕事をほかの人にとられたりするのを、とくにいやがっていた。

会社で仕事をしているときのママは、きつとすてきなんだろうな、とはおもう。

（でも、きょうのこと、わすれてしまったのかしら。）

このあいだのお誕生日にだって、はやく帰れなかったのだ。マミ子のことなんか、これっぽっちも頭のなかにないのかもしれない。

そういえば、こんなこともあったな、とマミ子はおもう。

小学校三年ぐらいのときだった。遠足にいった、おにぎりをほおぼろうとしたマミ子は、かすかだが、おにぎりが悪臭をはなっているのに気づいた。ママは、まえの夜、企画書をつくるため

に、家に帰ってからもおそくまで仕事しごとをしていた。だから、翌朝よくあさ、時間がなくて、前日ぜんじつののこりのごはんでおにぎりをこしらえたのだ。マミ子のほうは、ヒロ子やあけみのお弁当べんとうをいっしょに食べたから、なんともおもわなかったのだが、あとでそれを知ったママは、大きなショックをうけたようだった。

テレビでは、わかい歌手かしゅが、あまりうまくもない歌うたをうたったあとで、えんえんと悪ふざけをいっている。

「あんななんか、だいきらいようだ。」

そういいながら、マミ子はチャンネルをかえようとした。

そのとき、玄関げんかんのチャイムがなった。

マミ子は、いすをけとばしながら、玄関げんかんへとんでた。もう、目がさしたような顔の色だった。

「お帰りなさい、ママ。」

ドアのかぎをはずすと、やっぱりママが立っていた。みだれてひたいはりついた髪かみ、あせをかいた鼻はなの頭。大きくあがりさがりしている肩かた。マミ子が想像そうぞうしていたとおりの、大いそぎで階段かいだんをあがってきたのだ。

マミ子は、さりげなく、けれどすばやく、ママの持ち物を点検てんけんした。

ママの持ち物は、いつもの大きなショルダーバッグだけだった。ママのうしろにも足もとにも、ほかにはなんの荷物も、ましてデパートの包装紙につつまれた箱などはないのをたしかめると、マミ子はがっかりした。

「ごめんごめん、打ち合わせがのびてね。電話しようかとおもったけど、その時間もおしくて、とんで帰ってきたのよ。」

まっているあいだのマミ子の気持ちなど知らぬげに、くったくのない笑顔でママは、へやにはいってくと、

「あら、もうすっかり用意ができてるのね、まあ、すてきなケーキ。一・二・三・四……十・十一・十二。」

と、いちいち指をたてながら、ろうそくの数をかぞえた。

「お誕生日、おめでとう」

ママは、うたうような調子をつけていった。マミ子は、てれわらいをした。

「さあ、ろうそくに火をつけて。そしたら、さっそくおすし、いただきますしうよ。おなががすいたでしょ。」

そういいながら、ママは、さっさいすにこしかけた。どうやら、おなかのすいているのは、ママらしい。